

「宇宙に憧れて」

長谷川 晃子(JAXA 宇宙科学研究所)

「ねえねえお母さん、お月さまのところへロケットで行ったらお月さまは外国なの」
ふと何気ない一言を母に言ったあの時から25年。まさか宇宙関係の仕事に携われるとは夢にも思っておりませんでした。アンドロメダ銀河の美しさに感動し、流星群観測、「向井千秋さん」が乗ったスペースシャトル、天文台、プラネタリウム…全ての出来事が少しずつ心に刻まれてきました。耳の不自由な子供たちが知りたいと思うことを積極的に聞くことができるバリアフリーな環境があれば、どんなに目を輝かせて、宇宙に対する興味を深めてくれるだろうか、近いうちに実現できたら嬉しいなと思っています。

1. 生い立ち

1.1. 宇宙を意識し始めた小さな頃

私が一番最初に宇宙を意識し始めたのは、5歳のころだったようです。耳が不自由であることを知った母は、私に様々な言葉を体験と共に教えようと考えており、十五夜ですすきと丸めたお団子を飾り、空に丸く浮かんでいるのが「お月さま」と教えてくれました。その「お月さま」を見て、私は「ねえねえお母さん、お月さまのところへロケットで行ったらお月さまは外国なの」と言ったようです。覚えておりませんが…その時の言葉を書き留めた本があります。

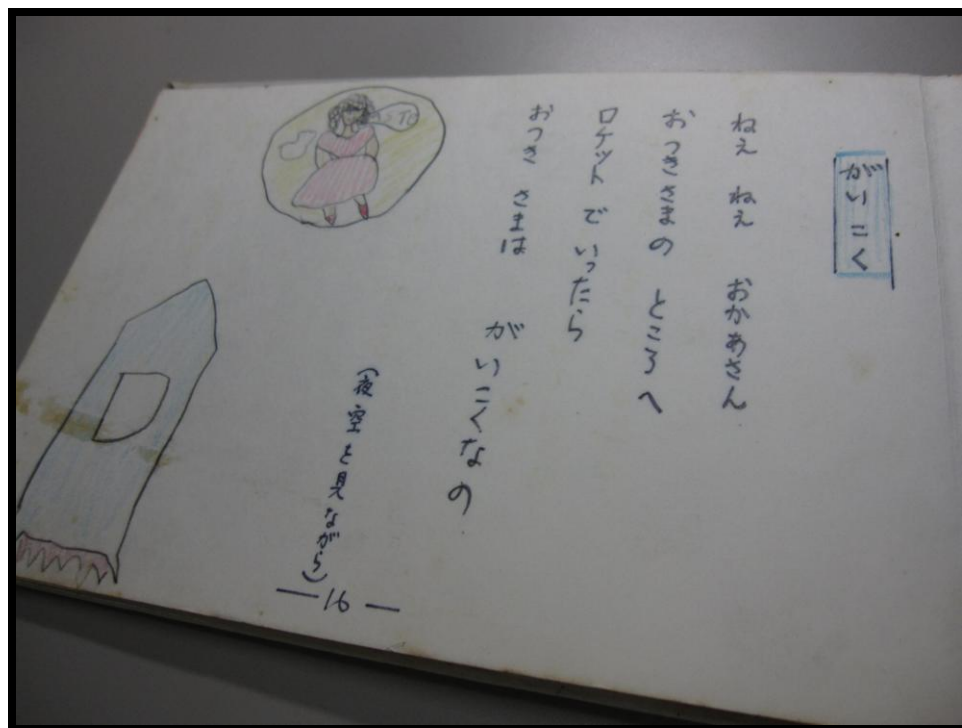


写真1 私が小さい頃の何気ない一言を母が書きとめた本

右側には「ねえねえおかあさん おつきさまのところへロケットで行ったら おつきさまはがいこくなの」と母が書いた文章が書いてあり、左側の下には私が小さいころ描いた、水色の大きな窓のついたロケットの絵と、左上には大きなお月さまとその中に外国人の女性の絵があります。

その言葉で、宇宙に興味があるのかもしれないと思った母は、子ども科学館やプラネタリウム、お月さま観測会などのイベントに連れていき、多くの体験をさせてくれました。そのおかげで、自然と星や宇宙に夢

中になりました。

1.2. 遠い星々に想いを馳せていた小学生時代

小学生時代は、星空見学会イベントに参加したり、星座の由来が書かれたギリシャ神話の本に虜になっていました。私は、山羊座なのですが、山羊座は上がヤギのまま、下が魚の尾の姿になっていますね。何故だろうと思っていたのですが、ギリシャ神話の本に、ある日パーティで楽しく過ごしていた上半身が人間で、顔と下半身の山羊の姿をしているパンは、巨大な怪物に襲われそうになり、逃げようとしていたところ目の前にあった川(ナイル川)に気づき、魚に変身して飛び込もうとしたようです。しかし慌てていたため、変身がうまくいかず、下半身は魚で、上半身は山羊のままの姿になったようです。慌てんぼうな人が多いのだとも書かれていました。ちょっと私にも当てはまるので、ドキッとしてしまいました。

1.3. 向井宇宙飛行士に憧れた中学時代

中学時代には、日本人女性初の宇宙飛行士向井千秋さんが、スペースシャトルで宇宙へ！ということで新聞もニュースでも大騒ぎのときがありました。私もそのニュースを見て、女性でも宇宙に行けるんだ！ととても興奮したのを覚えています。私も宇宙へ行きたいなと思い始めたのは、このころだと思います。向井千秋さん、とてもかっこよかったです。今も憧れの人です。

その他に、印象に残った天文台がありまして、それが「ぐんま天文台」です。家族で行ったのですが山道をずっと行くと、広い駐車場があり、そこから山の頂上にある天文台まで登る必要があったのですが、その時に、「熊に要注意。鈴を持ってください」と書かれた看板があり、とてもびっくりしました。真に受けた私は鈴をずーっと鳴らし続けながら登っていき、突然広がる原っぱに出て、そこから満天の夜空が見えました。熊への緊張感が、一気にまばゆく輝く星空への感動に切り替わった瞬間でした。今でもとても印象に残っています。

他にも印象に残っていることと言えば、真夜中にしし座流星群を見たときです。その年のしし座流星群は、雨が降るように見えるだろうと言われており、ニュースでも新聞でも大騒ぎしていたので、家族で見に行こう！ということになりました。父が星がよく見えるところがある！と自信満々に私たちを連れ出しました。どこに行くのだろうと楽しみにしていた私は、30分後に青ざめることになりました。その場所というのが、実は八王子にある広大な霊園だったんです。父はここなら星がよく見えるはずだ、とすごい笑顔で言っているのですが、私は他の何か見えてはいけないものが見えてしまうんじゃないかとすごい不安なまま、とにかく下の方を見ないようにして、しし座流星群を眺めていました。寒い冬のことでした。今でも鮮明に脳裏に残っています。

1.4. 宇宙への進路を本気で考え始めた高校・短大時代

進学した高校は、たまたま校舎の上に天体ドームがあるところでしたので、惑星観測会など時々実施している高校でした。ある日、惑星観測会の知らせがあり、私はとても楽しみにしていたので喜んで赴いてみると、生徒はなんと私一人でした。私の周りに宇宙が好きな人は誰もいなかったようです。寂しかったですけれど、おかげで天体ドームを独り占め出来、その時に見えたのは、衛星が4つ一直線に綺麗に並び、真ん中に巨大な模様をまとった木星でした。この目で見たのは初めてでしたので、感動しました。真っ暗な天体ドームの中で一人、夜空を眺めながらうっとりしていました

3年になり、進路を考え始める時期を迎えます。実は、宇宙や星は好きなのですが、物理などはとても苦手でした。でもせめて宇宙に関する仕事に就けたらいいなと思っていたところ、筑波にある龔のための筑波

技術短期大学(現:筑波技術大学)の卒業生が、プログラマーとして宇宙関連の企業に勤めているということを知り、私もこの道しかない！と入学を決めました。

実はそれまで普通の学校で育ちましたので、手話も知らなければ聾という世界も知りませんでした。今となつては、この短大に飛び込んで本当に良かったと思っています。授業が100%分かるというのがどれだけ大事か、改めて気付きました。教授の話していることに対して、自分の意見をしっかりと伝える。そんな環境の中で、自分の考えや視野がどんどん広がり始めました。また、高校時代にコミュニケーションが心配だと断られた海外留学の話も、アメリカ手話や国際手話というものがあるので問題ないと背中を押してもらえ、おかげでアメリカ、中国、北欧へと研修旅行に参加し、多くの異なる文化をもった聾学生と交流することができました。この経験は私にとってとても貴重な経験となりました。

しかし、肝心のプログラミング技術は全く身につけませんでした。卒業後は、もう一度プログラミング技術を一から教えてくれる企業に入社し、改めて技術を磨こうと思っていました。4年後、なんとか一通りのプログラムは作れるようになったものの、宇宙関連の仕事に就くのは、遠い遠い夢のように思っていました。そしてすっかり忘れてしまっていました。

その時、たまたま就職活動をしていた友人が、自分のやりたいことを仕事にしたいと頑張っている姿を見て、ずっと宇宙に憧れていた自分の思いが突然湧いてきたのです。ちょっと調べてみようかなと検索したときに出てきたのが、JAXAの障がい者枠の募集でした。その募集を知ったのが、締切の4日前。応募しようか迷っていたところ、母の「絶対落ちるから大丈夫。受けてごらん」という言葉で、力が全部抜け今までの気持ちに区切りをつけようと、落ちる気満々で応募したのです。その結果、こうして今 JAXA にいるわけですが、今でも信じられない自分がいます。

JAXA での仕事内容を少しお話します。一言でいえば、科学衛星の運用スケジュールを作成しています。今運用している日本の科学衛星は、あけぼの、ジオテイル、すざく、ひので、あかつき、イカロス、ひさきの7つあります。アンテナは長野県臼田に直径が64m、鹿児島県内之浦に直径が34m、20mの3つがあるのですが、いつ、何時にどの衛星がどのアンテナを使用するのか、その調整と作成を担当しています。調整のやりとりはすべてメールで行いますので、電話ができなくても仕事ができるのです。自分にぴったりの内容だと思っています。

2. 宇宙の何が魅力的？

「いま、見ている星が今という時ではない」

私がいつも不思議に思っていることがあります。それは、いま見ている星が、今というときの星ではないということです。遠いところからやっと私の目に届くその理屈は分かっているけど、やはり今という瞬間に、過去の星が見えているというのがどうしても不思議で、その不思議さがとても魅力的です。今と過去が1つになっているこの瞬間がとても好きで、星空を眺めながら色々なことを考えたりしています。

宇宙関連の仕事に就くという夢を果たせた私のいまの夢は「実際に宇宙に飛び出て、地球を眺めたい(眺める!)」です。そのために、今からコツコツと貯金しています(笑)。今の自分がいるのは、あの時に支えてくれた人がいたから、そして自分で踏ん張れたからだと思っています。「“今”に挑み、“未来”を拓こう」という精神で、これからも頑張っていきたいと思っています。

(聾学校での講演で、多くの子供が目をキラキラ輝かせながら「何故？ どうして？」と質問してくるたびに、もっともつとこの子たちの興味を深めてくれるバリアフリーな環境があれば嬉しいなと思います。私もささやかながらその手助けができれば嬉しいなと思っています。)